

4) アカネ=茜

アカネはアカネ科の多年生ツル草で、本州以西の平地から低山地帯に普通に見られる。根は太く生根は黄色味を帯び、乾燥すると橙色となる。根にはアリザリンやプルプリンなどの色素を多く含み、赤黄色の染料にする。茎は角柱形で長く伸びて分枝し、葉は4枚が輪生するように見えるが、このうちの2枚は托葉である。夏から秋にかけて多くの円錐花序を出して、ごく小さな淡黄色の目立たない花をつける。和名の由来は根が赤黄色をしているためとか、赤丹(アカニ)が転じたものなどの説がある。別称としてはアカネカズラ、ベニカズラ、コガネクサなどである。学名は『*Rubia akane*』で、属名は赤に由来するラテン古名、種小辞は和名のアカネからで、イギリスでの呼称は『madder』である。中国では『茜草』(センソウ)と呼ばれ、漢方では茜の根を茜根(センコン)といい、通経、浄血、利尿、止血、強壮などに用いられた。

さて『万葉集』には茜という言葉の見られる歌が13首あるものの、植物そのものが歌われているものはなく、「茜さす」とか「茜さし」といわれ、「紫」や「日」、「昼」、「照る」などにかかる枕詞として用いられている。茜を含む最も有名な歌は額田王の

茜さす紫野行き標野(シノ)行き 野守は見ずや君が袖ふる

の歌であろう。紫のところでも登場した歌であるが、「茜」が最も古い染料の一つであることから、染料をとる植物の代表とされていたため、やがて枕詞化したものと考えられる(『衣と紙に関わる木と草と』における「栲」(04-03-01)を参照)。

『魏志』の「倭人伝」の正始4年の項には、以下のように記されている。

その四年、倭王はまた大夫伊声耆(イソウケ)・掖邪狗(エヤク)ら八人を使い遣わし、生口(セイコウ)、倭錦(ワニシ)、絳青縑(コウセイケン)、緜衣(メンイ)、帛布(メンブ)、丹、木柎、短弓矢を上献す。

貢ぎ物の『絳青縑』の「絳」は「紅」を、「縑」は絹織物を意味するところから、これは茜色に染めた絹織物だという説がある。緜衣、帛布は絹の衣服と絹の布地だったのだろう。

茜の染色方法は典型的な媒染染色で、まず被染物を媒染剤に十分につけて、その後、茜の染料に浴染する『先媒染』によるもので、媒染剤にはアルミニウムを含む椿や榊などの灰を用いたが、先進国、中国では次第に**明礬**(ミョウバン)を用いるようになった。このため明礬は東西交易物の一つになり、日本でも古くは中国から輸入していたが、江戸時代になると国内で生産されるようになった。現在の大分県別府を初めとして、熊本県の阿蘇や長崎県の島原、信州の松本、群馬県の草津などが明礬の産地となった。**明礬**はカリウム、アルミニウムなどを主とする硫酸塩鉱物の一つで、正八面体の結晶である。硫黄鉱床などに産することが多いため、別府、島原、草津などの温泉地では、副産物として得ることができた。別府に明礬の地名が残るのもこのためである。こうした技術革新を背景に幕府は1735年(享保20年)に江戸と大阪に『明礬会所』を設けて、明礬の独占的な販売を許可する一方、取引所以外での明礬取引を禁止した。

さらに1758年(宝暦8年)には、京都と堺にも会所を設置して、明礬取引の普及に努める一方で、全ての脇取引を厳しく規制した。明礬は火薬を作る原料にもなったので、あくまでも幕府の統制下に置くことが求められたのだろう。また当時の染色法では、媒染剤や染料に何回もつけることにより、濃度が増してくるため、美しい色を出すには相当の日数と手間がかかった。インドネシアやインドの茜染めは、インドアカネによるもので、染料にタンニンなどを混ぜて、鮮やかな色を出しており、これには何か月もかかるといわれている。しかし明礬の利用はこうした染色を比較的簡便に行なうことが出来たから、明礬の需要も時代とともに増大していったのである。

ヨーロッパではプリニウスの『博物誌』にも茜は登場し、西洋アカネを用いた染色は、古代ギリシャの時代から盛んに行なわれていた。ヴェルギリウスの『田園詩』にもアカネについての記述があり、アカネの草を食べた羊はその毛が赤くなったと歌っている。

難しい話はさておき、この辺で一休みするとしよう。この染色の項にぴったりのユーミンの歌があるので、ご紹介しておきたい。久々のユーミンですのでご勘弁を！

晩 夏

ゆく夏に 名残る暑さは
夕焼けを 吸って燃え立つ葉鶏頭
秋風の 心細さは コスモス

何もかも 捨てたい恋があったのに
不安な夢があったのに
いつかしら 時のどこかに置き去り

空色は水色に
茜は紅に
やがて来る 淋しい季節が恋人なの

丘の上 銀河の降る グランドに
子供の声は 犬の名をくりかえし
ふもとの町へ帰る
藍色は群青に
薄暮は紫に
ふるさとは深いしじまに輝きだす
輝きだす

もう一つ茜の色を髣髴とさせてくれる詩に、木山裕策氏が歌う『home』がある。木山氏は左側甲状腺に悪性の腫瘍が見つかり、全摘出手術を受けた。この際、声帯を失う危険性があったが、もし声帯が無事だったら、学生時代からやっていたバンドのボーカルにもう一度チャレンジしようと悲壮な覚悟を決めて、手術に臨んだ。その後手術は成功し、声帯も奇跡的に残った。そしてリハビリの結果、歌を歌えるまでに回復、自分の声をCDに残して4人の子供たちに聞かせたいと願うようになったという。2007年に日本テレビ系の『歌スタ!!』に出演したことがきっかけで、多胡邦夫氏の目にとまり、同氏の強い支援を受けて、サラリーマンを継続するかたわら、歌手としての道を歩み始めた。このため平日はサラリーマンとして生活し、休日には音楽活動を行うという日々を過ごしている。2008年この『home』でデビューを果たし、人々の心に、平和な家庭の有難さをしみじみと伝えている。『第59回NHK紅白歌合戦』にも出場。『home』の作詞・作曲は勿論、多胡邦夫氏である。

home

晴れ渡る公園で不意に僕の手を握り返した
その小さな手で僕の身の丈を一瞬で包んでしまう
君がくれた溢れるほどの幸せと真っ直ぐな愛を
与えられてるこの時間の中でどれだけ返せるだろう

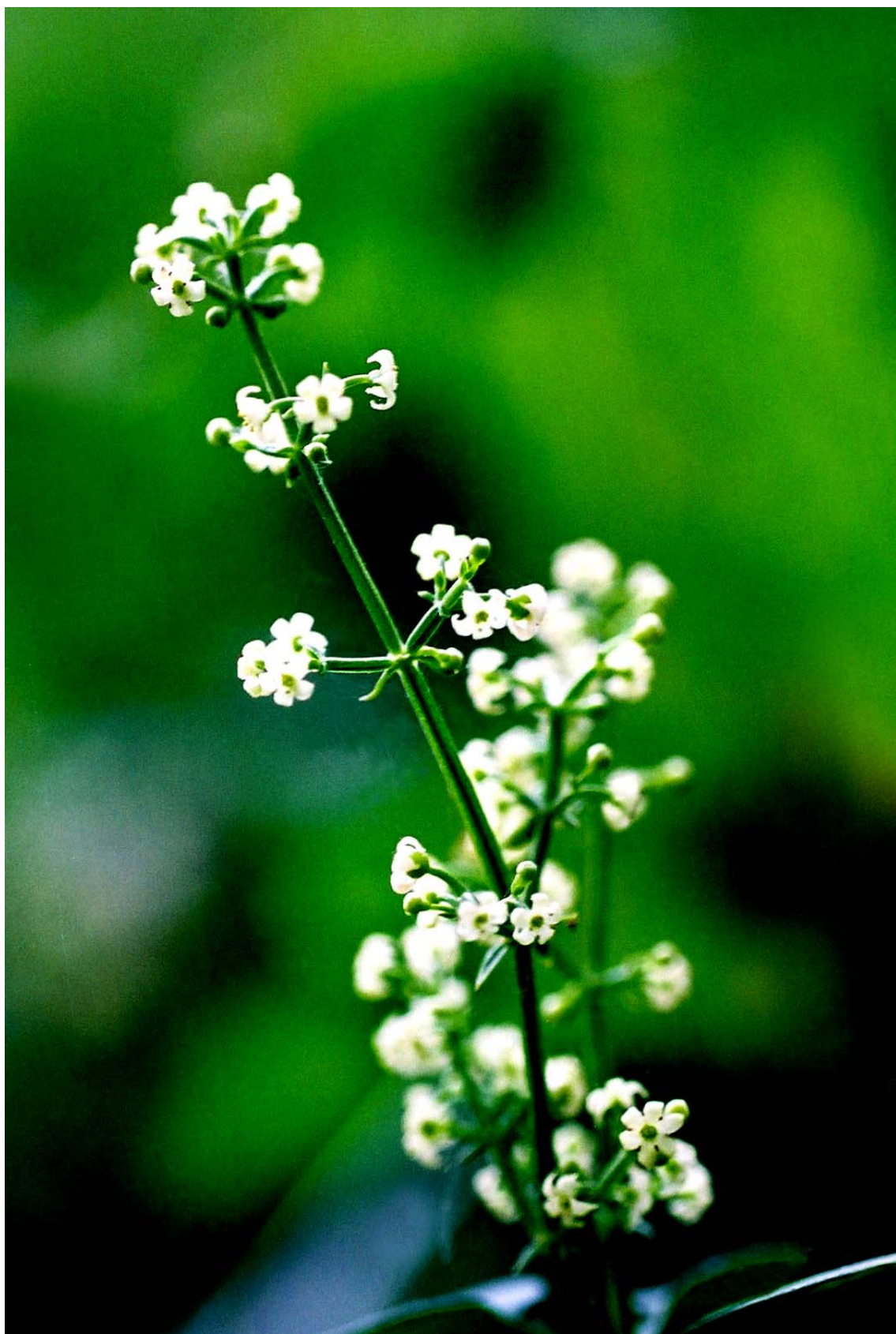
帰ろうか もう帰ろうよ茜色に染まる道を
手を繋いで帰ろうか世界に一つだけ my sweet home

変わっていく君のスピードに近頃は驚かされるよ
嬉しくもありなぜか寂しくも ゆっくり歩いていこう

あどけない君の笑顔も何か企んでる仕草も
そう全部が宝物だよ世界に一つだけ my sweet home

不思議な事に君を愛しく思えば思うほど
パパのパパやママのママに本当に有難うって言いたくなるんだ

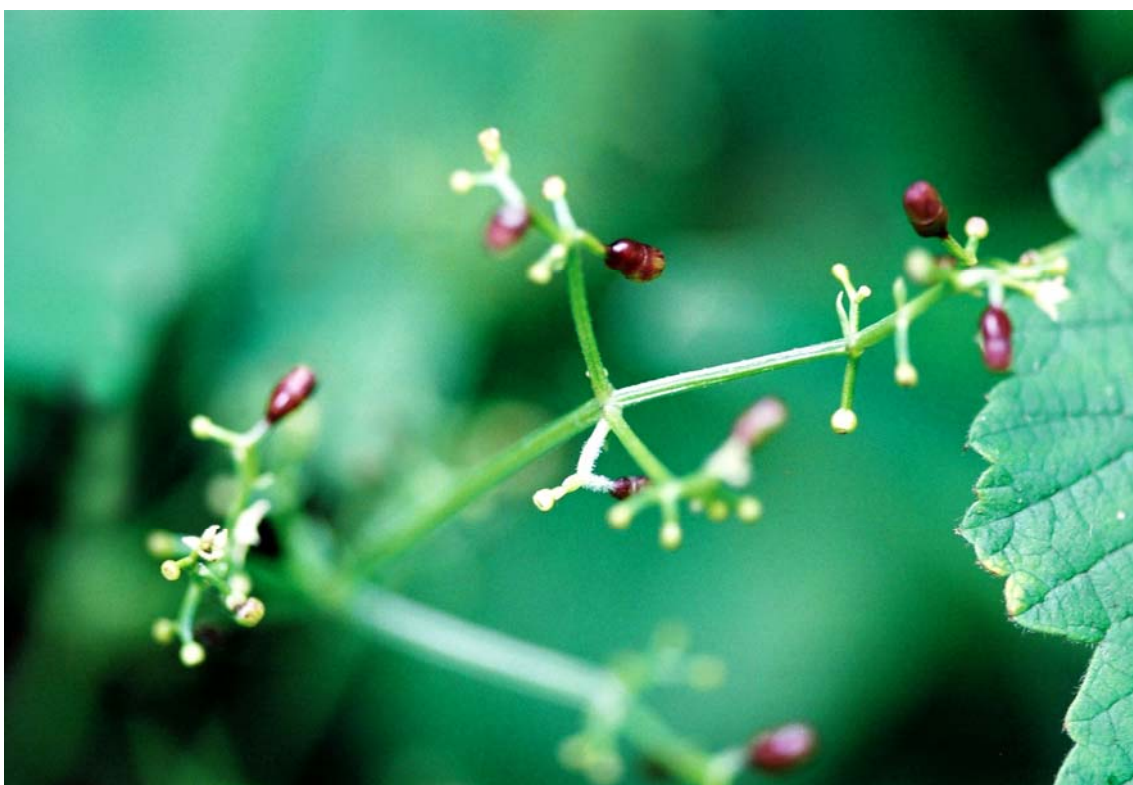
帰ろうか もう帰ろうよ茜色に染まる道を
手を繋いで帰ろうか世界に一つだけ my sweet home
何時も何時の日もありがとう



アカネの花は花径 3mmほどで、集まって咲き**円錐花序**を作る(群馬県高崎市染料植物園)。



アカネの花は本州以西であればどこでも見られる。しかし花径は3mmと小さく、しかも目立たない色なので見落としてしまうことが多い(千葉県東金市)。



アカネの若い果実も小さくて見落としがちである(長野県佐久穂町八千穂高原)。

[目次に戻る](#)